

箴言9章1－6節

エフェソの信徒への手紙5章15－20節

ヨハネによる福音書6章53－59節

福音書と使徒書は、前回の続きですが、旧約日課は箴言が選ばれています。箴言は、コヘレトの言葉と並んで、知恵文学の一つです。本日は、この箴言の内容を踏まえて、知恵に注目して、ヨハネ福音書の物語やエフェソ書を考えたいと思います。

旧約日課で最初に気付く点は、「**知恵は自らの家を建て、七本の柱を刻んだ**」(箴言9:1)と、「**知恵**」が、主語になっていることです。「**知恵**」が擬人化されているのです。これは箴言など知恵文学の特徴です。知恵文学において、擬人化された知恵は、言葉と結びつき、主なる神様と同じ存在、あるいは天地創造の初めから神様と共にある存在として尊ばれています(箴言8:22-23)。

「**自らの家を建て、七本の柱を刻んだ**」は、「(知恵)自らの家」を「建て」たのですから、いわゆる「神殿」、あるいは主なる神様を象徴するような場所を、自らで用意したことを意味します。七つという数は、『聖書』ではよく用いられる数ですが、神殿と結びつけますと、メノラーと呼ばれる七本建ての燭台を想起させます。その場所が作られる目的は何かというと、「**いけにえを屠り、ぶどう酒を調合し、さらに食卓を整え**」(箴言9:2)と「**来て私のパンを食べ私が調合したぶどう酒を飲む**」(箴言9:5)ためです。つまり、食事をすることです。知恵が、神殿という場所とそこでの食事の準備をするというのは、不思議な描写です。しかし、詩編23編の5節にある通り、主なる神様が整えてくださる食卓は、人間にとってこの上ない喜びにほかなりません。知恵はその喜びの食事を備え、招くのです。

この食事へと呼び掛けを行う存在は誰かということ、「**若い娘たち**」です。この言葉は新共同訳でも口語訳でも「**はしため**」となっていました。本来の意味は、小さい女の子ですから、新しい聖書協会共同訳の方が原語の意味に近いと思います。ただし、小さい女の子が、公式の場で何らかの公の宣言をするということは通常ありません。それゆえ、この表現は、逆説的なのです。

その逆説的な表現が、食事に招かれる人にもおよびます。招かれるのは「**思慮なき者**」と「**浅はかな者**」(箴言9:4)だからです。この部分は、口語訳、新共同訳、新しい聖書協会共同訳でそれぞれ異なっており、どの訳が適切か比較すればするほど、少し分かりにくくなってしまっているのですが、いずれの訳でも、知的に優れた人ではありません。そのような人が、「**思慮のない業を捨て、生きよ。分別の道を進み行**」くために招かれるのです(箴言9:6)。

箴言のこの箇所が示していることは、本来人間が何かを整え、主なる神様をたたえるべきであるのに、主なる神様と同じ知恵の方から、人間の思いを超えて備え、呼びかてくださるという逆説です。そのように見ますと、この箴言の文言は、イエス様の生涯と活動に共通する部分があります。主なる神様の独り子であるイエス様が、人間的な思いを超えて、十字架の死から、そ

の十字架に象徴された事柄にこそ、最も大切な知恵があることを示し、命へと招いてくださるからです。もちろん、箴言は、イエス様の存在を想定してはいません。またその内容が求めていることは、心を新たにして律法を守ることです。しかし、大切な事柄は、主なる神様の方からそれができると招いてくださっていることです。教会に集められるわたしたちも、構造は同じなのです。イエス様が招いてくださったからこそ、礼拝に集っているからです。

そのように考えます時、本日の使徒書であるエフェソ書で、「**そこで、知恵のない者ではなく、知恵のある者として、どのように歩んでいるか、よく注意しなさい**」(エフェソ 5:15) や、「**だから、愚かにならず、主の御心が何であるかを悟りなさい**」(エフェソ 5:17) とある点は、この逆説的な知恵に基づいて、順説に戻っていることが分かります。また、本日の部分は、エフェソ書における教えの結論であり、そのあとには教会への具体的な指示が続きます(妻と夫、子と親、奴隷と主人について)。その指示にある文言は、今日的な感覚では、字義通りに受け止められない部分もあります。しかし、示している事柄は、イエス様の十字架が示す逆説的な知恵から何かを見る時、同じ事柄が今までとは異なって見えるということです。

そのように見えること、あるいは見ることの大切さは、本日の福音書のお話でも示されています。そして、それは人間的な知恵による誤解という形で示されています。ただし、イエス様の言葉には、「肉を食べる」「血を飲む」という表現が三回用いられ、ことに「食べる」という部分の後半の二つは、どちらかという、「むしゃむしゃ食べる」というニュアンスがあります。人の子の肉を「むしゃむしゃ食べなければ」と語っているわけですから、誤解を招くのは当然です。それゆえに、弟子たちが逃げ去ったと続くのですが、その部分は来週学びます。

ヨハネ福音書がこのような誤解を招く具体的な表現を語った理由は、いろいろに考えられますが、最も大切な点は十字架という出来事における逆説的な知恵の強調です。つまり、イエス様の言葉は、十字架の出来事が、救いを引き出す公式でも不思議な魔術でもなく、人間が簡単には理解できない、あるいは受け入れられない、受け入れたくもない出来事だということを、改めて示しているのです。しかし、そのことを通して主なる神様は愛を示された、その点に気が付くとき、誰でも本当のいのちを歩むことになり、今までと違う世界が見えるのです。

イエス様が示してくださる世界とは、十字架の死というようなむごたらしい死は、現在だけではなく、過去においても未来においても、イエス様の十字架の死だけでよいという世界です。今、争い合って、誰かにそのような死を与える必要はない、過去の死の復讐をする必要もない、未来において誰かの死を計画する必要もないという世界です。もちろん、この地上において、生き物として人間の死は、避けられません。しかし、永遠のいのちの希望をもって、多くの人とともに、天国での再会を信じながらそれを迎える時、わたしたちは天上にある本当のいのちを希望とすることができます。その希望が、この地上にも、まことの平和をも取らすことを信じて、これからもイエス様に招かれて礼拝を続けていきたいと思えます。